新世界に於ける
コロンブス前の民族および文化の序論

メリー・エレン・グッドマン
金子尚一訳

この論文はメリー・エレン・グッドマン女史 Assistant Prof. Mary Ellen Goodman Ph.D. が、昨年十二月十二日、立教大学文学部主催の講演会に於て「新世界に於けるコロンブス前の民族と文化」と云う題名の下に講演された原稿で、同女史がその後整理されたものを、講演の際に通訳をされた金子尚一教授にお願して邦訳したものである。同女史は米国マサチューセッツ州、ウエルスリー大学 Wellesly College の社会人類学部の助教授をされており、目下フルブライト研究員として日本に滞在されている。因に同女史の夫君は原子物理学の権威で Massachusetts Institute of Technology の教授をしておられ、夫人と同様にフルブライト研究員として日本に滞在中である。

新世界物語の第一章

科学者も一般の人も共に西半球の主要な陸塊を屢々新世界と呼んでいます。一般の人はさておき、科学者は新世界の新らしさに関する重要な二次元をよく理解して居ります。一般の人に「何故アメリカ大陸とそれに近接する島嶼を新世界と云うのか」と問うて見たとしますと、恐らく彼はゼェノアの航海者コロンブスの名前を引合に出すでしよう。即ち、十五世紀の末から十六世紀の初にかけて発見の輝かしい黎明となり、それ以来旧世界の人々は新世界についてたん〳〵知るようになり、そこに移住する人の数も多くなつてゆきました。併し科学者は新

世界の新らしさに関して別の長い物語をすることができます。彼の物語は数百年ではなくて、数千年・数万年を尺度として居り、五十万年以上、恐らく約百万年前の人類起源に遡るものであります。人類の起源は勿論旧世界の出来事であつて、その後の色々な出来事も今から二万五千年迄はみな旧世界で起つたものであります。その頃ユーレシャやアフリカ大陸の各地に住んでいた多くの狩猟民族の一部の者が住み良い場所を求めて、今日私達がベーリング海峡とよんでいるところをわたつて、所謂、アメリカ大陸に辿り着いたのであります。

しかしその二万五千年も、人類の歴史から見ればほんの束の間であり、恐らくその二、二%に当るに過ぎません。そして米洲大陸は人間が演じたドラマの一場面の背景となつたに過ぎず、その主な舞台はユーレシャ・アフリカ・大洋洲にあつたのであります。要するに新世界は歴史家の時計で計つても新しいばかりでなく、考古学者――先史学者の時計で計つても新しいのであります。即ち、新世界は西暦一四九二年にも新らしかつたのみならず、紀元前二万三千五百年前にも新らしかつたのであります。それはコロンブスにとつて新らしかつたのみならず、コロンブスを迎えた人々の遠い祖先の人達――見えず、紀元前二万三千五百年前にも新らしかつたのであります。それはコロンブスにとつて新らしかつたのみならず、コロンブスを迎えた人々の遠い祖先の人達――見えず、紀元前二万三千五百年前にも新らしかつたのであります。それはコロンブスにとつて新らしかつたのみならず、コロンブスを迎えた人々の遠い祖先の人達――見え

九百四十代（ゼネレーション）前の人達にとつても新らしかつたのであります。

ベーリング海峡を越えて新世界へと少人数の移住は幾度となく繰り返されました。これらの移住はウイスコンシン氷河作用（アメリカ洪積世の最後の局面）の真中に恐らく始まつたのでしよう。この氷河時代に人間は、時には氷河作用の最も盛な時代に起る海面の著しく低くなることによつて出来た陸地づたいに、或は張りつめた氷の上をこの海峡を渡つて行つたのであります。彼等がマンモス・ラクダ・馬・バイソン（北米野牛）のような洪積世の動物群を追い求めて行つたことは疑いありません。

移住者達は西部山系地帯の両側の氷の張らない回廊地帯を通つて、両大陸の東方に向つて扇形に転開して行つたのであります。そしてこの移動の速度に関しては多少分つて居ることもあります。例えば今日アメリカの最も古い人工物 artifacts として知られている北米合衆国南西地方のサンデヤおよびクロヴィス地方で発見される飛び道具の穂先は一万一千年から一万八千年位古いものとされています。また合衆国西部の諸州から発見される穴居時代の遺品はラヂオカーボン期日測定法に依りますと一万一千年、或はそれ以上も経つて居ります。また多分

中米のテペフパン人 the Tepexpan の化石も、恐らくその位経つているものと思われます。とにかく人間が中米に辿り着いたのは洪積世時代の動物群がそこに未だ生き残つていた時代であつたことは確であります。何故ならば飛び道具の穂先が原型のまゝのマンモスの骨と共に発見されるからであります。ラヂオカーボン測定法によりますと、紀元前六千年乃至七千年迄に人類は既に南米の南部地方に到達していたことがわかるのであります。この特定の証拠から見てさえも、土着のアメリカ人がコロンブスよりずつと以前に新世界に行き亘つていたことは明らかであります。欧洲人の殖民が始まつた時のこの広大なアメリカ大陸の全人口が八百万人であつたと推定されている事実から推しても、彼等の人口は全大陸に亘つて極く稀薄であつたことが判るのであります。

ベーリング海峡を渡つて来た最初の移民はその後に渡つて来た移民よりも身体的タイプがやゝ雑多でありました。ある者は長頭であり、その上非モンゴロイドでありましたが、後の移民達はモンゴロイドの型が増加してゆきました。民族のその大きい分類の内では非常に差異はありましたが、歴史的に有名なアメリカインデアンはみな本質的にはモンゴロイドであります。同じアメリカインデアンと申しましても実に雑多な人種であることは申すまでもありません。

アメリカ大陸に於ける新石器時代の革命

今日の人類学者――特にアメリカ合衆国の多くの人類学者――は、新世界の物語に非常に興味を覚えて居ります。そしてそれは単に地理上、歴史上彼等に近いと云う明らかな理由ばかりからではありません。彼等は鍬やラクダの毛のブラッシュや一局地や層位学のみに捕われてはいません。彼等は一局地が一地方・大陸・大陸間の出来事とどういう関係があつたかを調べて居ります。これ等の専門家達は、コロンブス以前の新旧両大陸の関係をくわしく調べ上げようと、懸命の努力をしております。そして事実の記録をまとめ上げる仕事の他に、もつと大切な仕事があるのです。一体、新石器時代の文化と新世界の複雑な都会的、文字を解する文化は、新世界の中に全く独立して発達したものかどうか――この問題は依然として疑問となつているのですが――それをはつきりさせることが彼等の目的であります。私達は以上のような文化が新世界では他と交渉なく発達したと信ずる相当の根拠を持つております。そしてもしそれが事実であると

すれば、それは人類の普遍的属性を証明する証拠となるのであります。例えば植物の栽培、動物の飼育、数学・天文学、都邑の生活、分業およびかような生活と関聯した社会組織形態等のように、人類が或る種の創意工夫をしたりする特定の能力を証拠だてることになるのであります。

このような人類の数多い創意工夫は旧大陸のそれと同様に新大陸の一層複雑な文化の特徴であります。しかし新旧両大陸文化の類似点は多くの明白な相違点をともなつておるのであります。従つてそれらの基礎的な創意工夫が旧世界の借物であるとは簡単に断言できません。又私達はその借物が伝来した経路をはつきりこゝだと指摘することもできません。北東アジヤを横断して北西アメリカへと移住した人類の足跡は、前期旧石器時代か又は中石器時代文化の人間が使つたのみ明らかにされております。また最近イカダで太平洋を横断した剝的な事実がありますが、（例えばコンチキ号のように）太平洋を「東方からでも西方からでも」横断して、人間や思想の重要な交流がかつてあつたとは信じ難いのであります。

従つて今日ではアメリカの人類学者達は、新世界の民族はベーリング海峡を渡つて来た移住者がもつて来た文化だけを、旧世界から借受けたのであろうと考えております。その原始文化の人工物とか生活面では恐らく次のようなものがあつたろうと考えられるのであります。即ち石器を削つたり（或は磨いたり）して作る技術、骨角等を磨いて道具を作る技術、道具に柄をつける技術、弓矢を用いたり犬を馴らす技術等であります。

新世界に輸入された生活面の技術は今述べたような単純な狩猟や採集的型のものであつて、輸入されたその他の文化も恐らく単純な狩猟や採集によつて支持された文化と同様に単純なものであつたと思われます。しかしキリスト教時代の初めまでは、新世界のある地域には立派な文化が繁栄しておりました。そしてその技巧の進化は数世紀に亘つて行われておりました。今日知られている最古の農業社会はペルー海岸地方にありまして、それは紀元前二千五百年に遡るのであります。しかし農業というものが始められた新世界の新石器時代の「革命」は恐らくそれよりずつと以前、即ち紀元前五千年頃から始まつていたものと思われます。

新世界の石器時代の文化は、南米の中央アンデスおよび中米地方に於て最も古くから発達し、そこから農耕その他石器時代の技術が遠隔の地まで拡がつて行つたのであります。即ちアンデスの中心地から農業の技術は北部南米にのび、アマゾン河の流域にまで及んだのであります。又それは紀元前二千年頃迄には中米から今日の合衆国の南西地方にまで及び、紀元前約一千年には合衆国の南東地方にまで達したのであります。アマゾン河の流域を除いてはこれらの石器時代の中心地はやがて新世界に於ける最も複雑な文化を有する地域となつたのであります。そしてその発達した文化はそれ〴〵重要な食糧の裏付があつたのであります。即ちアンデス地方では、ジヤガイモ即ちこれは今日不当にもアイリッシュ・ポテトウとして広く知られておりますが、これが主食であり、中米・北米ではトウモロコシが比較的人口稠密な地方の主食となつていたのであります。但しアマゾン森林地帯で採れるマニオク manioc（カサヴァ澱粉）は決して大きな人口を養う程とれませんでしたが、それでも新世界に於いては第三番目に重要な食糧となつたのであります。

新世界の人々は動物を飼い馴らすことでは大して見るべきものがありませんでしたが、植物栽培では彼等の天分を大いに発揮しました。しかしこの相違は環境的な条件に基因することは明らかであります。即ち栽培し得る植物が沢山あつたのに反して、飼育し得る動物は少なかつたのであります。その結果飼い馴らされた動物といえばどこにでもいる犬の他はアンデス山のラマ・アルパカでありまして、これに次ぐものとしてはアトル・七面鳥およびテンジクネズミに止まります。一方、土着のアメリカ人達が栽培した植物は夥しい数にのぼるのであります。すなわち既に述べた主食料の他に、各種の豆科の植物（数種）、南瓜の類、カラシ・トマト・チョコレート・南京豆・パイナップル・ゴム・タバコ・綿花・ヒョウタン・コ、ナット等があります。

（註）コロンブス以前に新旧両大陸に共存し食料となつた作物で、はつきり判つているものは数少いのでありますが、その中には以上あげた綿花・ヒョータン・コ、ナット、それにサツマ藷があります。そしてそれ等が両大陸に存在していたということは人間の手に依つてか、或は風・潮とかその他何等かの手に依るかは今日判然と致しません。

固有のアメリカ「文明」

旧世界に於ては、新石器時代の文化は先ずナイル河口三角洲地帯に始まり、少しおくれてその他、印度および北支那の二つの地域を中心としておこりました。同じ順

序で同じくこれら三つの中心地に於て世界最初の「文明」即ち都会的、文字を解する文化が現れたのであります。新世界に於てもその通りでありまして、所謂都会ずれのした文化が発達したのは、新石器時代の重要な焦点をなす地域に於てであり、即ちそれは中央アンデス山脈（南米）および中米地方に於てであります。これら二つの地域では紀元前一千年までに新世界の最も複雑な固有の文化の基礎はしっかりと置かれたのであります。

アンデス地方に於てはその頃既にインデアンの生活様式は、優れた陶器・織物・金細工等の技芸および宗教的儀式や可成り複雑な社会制度等を特徴としていたのであります。或る中米研究家の説に従えば、この中米に於ては紀元前一千年には既に数種の文字を解する半都会的な文化が栄えていて、町や村なども沢山あつて、色々な宗教的カルトも行われ、それに伴つて彫刻によつて神々を表現したり、神々や婦人の小さな群像などを作つたりすること、また文字を立派に書くことや暦を作ることも既に盛に行われていたと云うことであります。

中央アンデスの焦点

文化は個人と同じように「性格」というものがあります。このことを今少し専門的に申しますと、それぞれ独特の構成と民族精神とを示しているということになります。独特なアンデスの生活様式は、場所によりまた一時的に変化はしたけれど、中米の北方の偉大な文化とは、一種異つたところの「香り」と強調点と特色とをもつておりました。

アンデス人は新世界独特の産業家的――唯物論者的大政府主義者であつたといえば、少し単純にものを片附け過ぎるきらいはありますが、必ずしも間違いではありません。彼等は本来、優秀な工芸家であり、名工であつて素材と工程の把握の完璧さ、製品の明確な型を数多く造る技術に至つては彼等のそれは単なる手芸ではなく、芸術と申すべきであります。しかもこの優秀な工芸技術、特に織紐工業や金属工業に於ける工芸技術は、初期のアンデス時代の文化というよりは、むしろもう少しあとの時代――即ちコロンブスの米大陸発見直前のインカ文化の一つの特徴であります。

今日でこそアンデス系の二つの重要な初期の文化は相当有名になりましたが、それでもインカの文化の方が一般によく知られております。しかし実際は古い方の文化には一層芸術的なところがありました。事実この方面の

権威者、クローバー A. L. Kroeber 教授は、チャヴィン文化 Chavin-culture の彫刻を南米特有の芸術形式中、最も偉大なものとよんでおります。チャヴィンは中央アンデスで発達したところの三大文化のタイプまたは「波」の最初のもので、それは中央アンデスで西暦の初代に栄えたのであります。チャヴィン芸術、特に石彫に顕われたようなチャヴィン芸術は、「畏敬と恐怖の感銘を生みだすことを目的としておる。それは装飾的で非常に形式的で、象徴的で感情に満ちている。大きな牙・爪、のたうち廻る蛇のからみ合い、深い皺のいつた顔、物思いに耽つている眼等が、巨大なジャグァ Jaguars（アメリカ豹）やコンドルや、これらと人間との混血等と共にその特徴をなしている。先例となるものは何も知られていない。或る意味では恐らくモチカ the Mochica（地方的後期チャヴィン）の陶工のすばらしいリアリズムを除いては、その後につゞくペルー芸術は、みなそれから派生したものであり、その亜流である。」――

（註）クローバー著「人類学」一九四八年、八二九頁より八三〇頁。Kroeber, Anthropology, Harcourt Brace and Co., N.Y., 1984, pp 809–830)

アンデスの石工術と冶金術とは共にこの地方の特技であります。西暦の初頭の頃までにすでに相当に発達しておりました。そして（スペイン）征服時代に至る迄、その後、千五百年間この両者は栄えておりました。西暦七百年頃までは、アンデス人は巨大なカルト・ピラミッドのある町を建設し、灌漑その他、大規模な公共事業を建設したり、金・銀・銅の精錬や合金をやつていました。西暦千四百年頃迄には歴史的に有名なインカは、中部エクワドルから中部チリーに亘る領土を征服し、よく組織された能率的独裁的福祉国家をたて、政治的にもまた広義の文化的観点からいつてもアンデス地方に君臨しておりました。アンデスの話を結ぶに当つてクローバー教授の言葉をこゝに引用します。

「金属・木工・陶器・或は織布等、インカの器物はいずれも非野心的で素朴である。それらの型は一種古典的な慎しみを示す程、統制されていて素朴の良さと充実した技巧が目立つている。彼等の故国（例えば、高部アンデスのクズコ Cuzco の町およびその周辺）に於てインカ族は、廃除けやお椀のようなものから、巨大な石造建築のブロックに至る迄、そして岩床に刻まれた祭壇や天文観測所に至るまで、石工に辛抱強く、また甲斐〳〵しく励んだ。インカ芸術は全体的にいつて、広大な想像力や

深淵な愛情を欠いてはおるが、自尊心と自制心に充ちている」

（註）クローバー教授、前掲書、八三二頁。

中部アメリカ地域

中央アメリカと共に、メキシコの大部分は、知的審美的且つ宗教的であるといわれておるところの一種の文化的な「性格」を共有しておつて、これはアンデス人の素質や民族精神と対照をなしております。全中部アメリカ文化の焦点は、一連の文化形態を示すことによつてこれを考古学的に明らかにすることができます。即ちその文化形態は、文字を書くこと、宗教的儀式に関聯した精巧な石彫、象徴的な芸術、正確な天文学的観測に基づいた複雑な暦法、これはもと〳〵宗教的制度に関聯がありますが、位置・数および零の概念をも含む高等数学、一定の非常に雑多な社会に支配権をふるつていた身分の高い僧侶の支配者と、階段付きのピラミッドの上に建てられた堂々たる石造りの寺院（屢々持ち出し庇持 Corbel arch）を用いてあつたことによつて代表されております。

これらの形式は広く中部アメリカ全域に普及しておりましたが、中部アメリカ式文化形式中、最も独創的で且つ集中的一面が発達したのはマヤ文化地域に於てであります。即ち、現在の英領ホンデュラス・ガテマラおよびメキシコのユカタン半島地域に於てであります。西暦三百年以前は、当時ホンデュラスとガテマラにあつたマヤ文化の中心は、石造建築物・一般芸術・文字および基本的数学や天文学の研究等を含むところの生活様式がその特徴となつていました。西暦一千年迄には、マヤ文化は既に古くなつて、その全盛期を過ぎており、芸術のあらゆる形式中最も壮麗を極めたもの、即ち陶器絵画・フレスコ画・漆喰浮彫・浮彫・彫刻等は既に過去のものとなつていました。マヤの重要な儀式の物語の多くは、儀式を行う本殿の前面に建てられた一本石の碑に、日附も明らかに刻まれておりました。またその建物の中にマヤ人はコーベルアーチや円天井を建てゝいたのであります。当時はこの廃墟となつた祭典場は既に中部アメリカのジャングルの中に埋もれておりました。マヤ生活の中心地は現在のユカタン半島の中にありまして、こゝで十五世紀まで力強く継続しておりました。しかしその知的な審美的な要素は減退し、中央メキシコの高原文化の影響を受けるようになつていました。

このメキシコの中心地に於て、特に現在メキシコシテイの存在する高原の谷間に於て、マヤ文化と並行して一つの文化が長く続いていたのでありますが、それは年代的にもマヤの文化に近く、最も偉大な知的審美的要素をもつておりました。しかしコルテズ Cortez がメキシコを征服した時には、アズテック人 Aztec はコルテズに征服されるまで繁栄したアメリカ土着民）の文化の中にある粗雑なけば〳〵しさが全盛を極め、真のメキシコ文化は終りを告げていました。このコルテズが見出したアズテック人の文化と云うのは、政治的・軍事的・商業的要素の強烈な文化でありまして、広大な征服された領土に支配的な影響をもつものでありました。メキシコシテイの南方、ワハーカ Oaxaca のメキシコ領地の高原に、錯雑した文化のもう一つ別のメキシコの中心があつて、この第三の文化はヴエラクルーズ Vera Cruz 地方に繁栄したものであります。

新世界物語の別章

実に雑多な様式と背景をもつた、もつと単純なアメリカ土着の文化地域を一瞥することさえせずに私はコロンブス以前の物語に対するこの不備な序論を結ばねばなりません。この種の文化や環境適応性の詳細や、一種族と他種族との交錯した関係や、また新世界の有史前の文化によつてはつきり実例が示されているその他の文化力学 Cultural dynamics の原理等をよく理解するためには充分な時間の余裕と実地の旅行がどうしても必要となつてくるのであります。エスキモーの鯨祭り、イロクオイ同盟国 the Iroquois Confederacy、東部森林地帯住民の精巧を極めた古墳や葬式の習慣、北西部海岸地方の盛大な冬祭り Potlatches や、その他のはげしい威信競争 Prestige Competition の風習、南西地方人の落着いた生活様式、彼等の古代から変らない驚くべき程近代的な「アパート住い」などに私達は注意を払う必要があります。これらは北アメリカ大陸特有のものでありますが、これに相当する色々なものが中南米にも存在していたのであります。

未来を望んで

人間の勤勉・創意・発明は旧大陸の場合と同様に新大陸の記録に繰り返し留められてまいりました。最後に私達は公平無私の科学者としての立場をしばらく忘れるならば、必ず時には賞讃し、時には驚嘆し、時には慨歎せざるを得ません。私達は人類が自ら示した偉大な能力、

創造力に驚嘆し、その成果に喜びを共にすることができるのであります。と同時に私達はそれらを眼のあたりに見て、人類の永遠の悲劇を痛感せざるを得ないのであります。――それは決して必然的な病気とか永別ではありません――それは人間が他の人間に対して故意に作り上げた非人道と云う悲劇であります。

私達が人類の物語をひもとく時に、そこには数多くの偉大な発明や征服を見出すのであります。しかしその最大なるものはまだ将来に属しております。今日までのところ能力と応用の点に於いて人類の最大の発明は科学的方法と云うものであります。それは魔法の道具で、現代人はこの道具を用いて、物質的環境に対し奇蹟的な征服をしてまいりました。然もそれは過去二三百年このかたに於いて成就されたのであります。今や遂にこの魔法の道具は社会・文化環境の中に古代から存在する幾多の暴戻に対して用いられようとしています。それはとりも直さず力強い社会科学と云うものであります。今や社会科学は物理科学が為し得なかつたことを為し、また物理科学が犯してしまつた誤ちを正さなければなりません。皆様が今日社会科学者の努力に幸あれと祈られることは、とりもなおさず、来るべきすべての人類の幸福を祈ることに他ありません。

――執筆者紹介――

野々村戒三	本学史学科教授史学科長。	中川成夫　本学史学科講師。
手塚隆義	本学史学科教授。	後藤則夫　立教高等学校教諭。
林英夫	本学史学科専任講師。	山田和次　本学図書館勤務。
金子尚一	本学英米文学科教授。	